

自主シンポジウム15

養護的な環境について考える

企画・司会 戸江茂博（頌栄短期大学）
 話題提供者 豊永せつ子（福岡県 のぞみ愛児園）
 谷口英子（頌栄短期大学非常勤講師）
 木村睦子（大分県 くるみ保育園）
 指定討論者 石井哲夫（白梅短期大学）

企画趣旨 ◇戸江茂博

保育における環境は、子供の発達や保育という営みを明らかにする鍵概念である。子供の発達という側面から言えば、子供の自我が未熟であればあるほど、環境からの影響を受けやすく、かつ、子供の発達そのものが環境との相互作用を通してなされると言える。一方、保育者のかかわりや働きの側から言えば、環境保健的な配慮はもとより、子供が安心して生活ができ、子供がかかわりたくなるような環境を構成することが大切であるとされる。近年は、子供自身の生活体験や生活環境の変容にともない、幼稚園・保育所において「環境による保育」がつよく求められている。

このように強調されている環境を、教育要領及び保育指針は一致して、子供にとっての全体的な「状況」として捉えている。たとえば、「幼稚園教育要領解説」（文部省、1999年）には、「ここでいう環境とは物的な環境だけではなく、教師や友達とのかかわりを含めた状況すべてである」とあり、また保育指針には、「人、物、場が相互に関連し合って子どもに一つの環境状況をつくり出す」とある。状況としての環境というのは、きわめて重要な環境理解の在り方である。なぜなら、状況として環境を捉えることによって、「見えない環境」（子供と保育者との信頼関係、その場に漂い浸潤している雰囲気等）を環境として把握し、その発達的な意味を考えることができるからである。

このような環境理解を敷衍していくと、改めて保育における養護的なかかわりの重要性が浮き彫りになる。なぜなら、物的・人的環境の整備によって意図的に子供の発達を図るという、教育的な側面ばかりでなく、子供が安心して生きることができる居場所という状況をつくり出し、子供に寄り添い心を砕くケアリングによって子供の自己実現をたすける、といった養護的な側面での環境の意味が際立ってくるからである。シンポジウムでは、以上のような論点をふまえ、養護的な環境、あるいは養護性の豊かな保育環境について、いくつかの視点から問題提起し、ともに考えたい。

話題提供

◇豊永せつ子 物的環境からみる養護性

1. はじめに

「養護的な環境」とは、「大人のやさしい、温かく丁寧な世話を受けることにより、子どもが安心して生活し遊ぶことができることを保障された環境」と解釈できる。そのような環境を工夫し準備するために考慮すべき事項等について考察したい。

2. 養護的環境の工夫

子どもたちが毎日長い時間を過ごす「子どもの園」は、地域から見て(視て)どのように映るのだろうか。「早く入って遊びたいな」、「やさしい先生、待っているかな」、「昨日の遊びの続きができるかな」、「大好きな友だち、来てるかな」、「〇〇園で楽しいね。なぜか心がはずむのよね」などと、子どもたちが思ってくれるような環境が工夫されなければならない。そのためには、次のような配慮が必要不可欠である。

(1) 外観の魅力ある雰囲気づくり

- ア. 楽しく、おもしろそうな雰囲気。
- イ. やさしい、あたたかい雰囲気。
- ウ. 子どもの華やいだ声が聞こえる雰囲気。
- エ. 保育者の笑顔が見える雰囲気。
- オ. 外壁・建物の素材と色彩がかもしだす雰囲気。
- カ. 地域との調和がとれた雰囲気。

(2) 園庭を心のオアシスに

心にやさしく、あたたかい園は、時が静かに流れ、子どもたちの遊びがとめどなく流れる。また、子どもの解放感溢れる姿や笑顔が見られる。そのようなオアシスを準備するために次のような配慮が必要である。

- ア. 子どもの感性を豊かにする魅力ある遊具。
- イ. 心と体を癒す空間（場所）の確保。
- ウ. ともにある保育者、子ども、そして園庭の自然が生み出す温かい雰囲気。

(3) 保育室の雰囲気づくり

保育室は、保育者や友だちと過ごす重要な生活の場

である。集団の方が楽しいときもあれば、一人で遊びをなしとげたい時もある。大人にリードしてほしい時もある。そのような子どもの心を読み取る「勘どころ」をもつことが、保育者にとって不可欠である。

ア。家庭的な雰囲気と心にやさしさを；動植物との出会い、調和的な色合い、心が安定する保育室、壁面等空間の工夫。

イ。廊下の見直し；廊下は開放感漂う場であり、心の窓を開く場所にもなり得る。拘束されない場所としての廊下の価値を改めて見直すべきである。

ウ。事務所の価値の見直し；事務室は子どもの安住の場、子どもの心の居場所であり、子どもの心のサインを読み取る場でもある。

＊事例1：木製三輪車と5人の子ども

＊事例2：事務室の医務室化

3. まとめ

子どもが長時間を過ごす園は、全てが子どもにとって居心地のよい場所となるよう、保育者の創意工夫が求められる。子どもの心が不快な状態にならないように心がけ、常に「快」の状態、生活と遊びができるように保障すべきである。

話題提供

◇谷口英子 養護的な環境：ひととのかかわり

乳幼児期から児童期にかけての人との出会いが、その人の人生を左右するとも言われる。核家族化、ひとり親家庭の増加、就労形態の多様化を伴う女性の社会参加の進展など、家庭や社会のめまぐるしい変容の中で育児の社会化が求められている。現実には、家庭養護機能の低下や育児不安、親による虐待等、深刻な問題点が指摘されている。

本来子どもたちは、温かく、豊かな「人あかり」の中で安心して、無限の可能性を内に秘めながら生き生きと遊び、生活するものであるが、時に子どもたちが暗く悲しい表情を見せるときがある。これは、子どもたちが親や保育者にしっかり受容されず、心の絆が結ばれていないためであろうと思われる。親や保育者の生活経験や人間関係が希薄で、子どもたちの生理的、心理的欲求が十分に満たされず、このため子どもたちばかりでなく、親や保育者も情緒不安定になるような事例が多くある。また、乳幼児期に基本的習慣や豊かな情操等が育つことが、生涯発達の上で最も大切なことであるにもかかわらず、「はぶき保育」や「放任保育」になっていないだろうか。

乳幼児の保育は、心と身体をきめ細かく動かしながら大人の後姿で行うものであるが、職員間の人間関係

や保護者と職員との人間関係が温かければ、保育は半分以上成功であると言っても過言ではない。

話題提供

◇木村睦子 自然・地域社会からみる養護的環境

子どもの育ちは、人・物・場の相互作用を通して、大人が子どもの発達過程の中でどのようなかわりを持ったかで、その後の人格形成が大きく影響されることは言うまでもない。同じような人・物・場等の環境が提供されても、そこに丁寧な養護的なかわりがなければ、それは子どもにとって心地よい環境とは言えないだろう。ここでは、自然や地域社会からみる養護性について考え、子どもに豊かな自然の移り変わりや営みに気づかせることの大切さ、子ども自身が受けとめるさまざまな感受性や情愛の育ち等について考察してみたい。

1. 園庭は宝島

一日の大半の遊びが繰り返される園庭は、子どもたちにとって「宝島」となるような環境を整えたい。

- 1) 砂、泥、水に十分触れることができる。
- 2) 草花や虫の発見ができる。
- 3) 園庭はグラウンドではなく緑の森である。
- 4) ダイナミックな遊びが展開できる。

2. 園外は感性と知性の宝庫

心も身体も解放され、子どもたちの顔が一層輝きを増すように、四季の移り変りに目を向け、ありのままの自然や地域社会の中での生命の営みに興味をもたせることが大切である。

- 1) 自然の変化や生命の営みに気づくように。
- 2) 好奇心（興味や関心）をもってかかわることができるように。
- 3) 考えたり、想像したりする力を伸ばせるように。

このような感性や知性を豊かに育てるために、保育者は子どもの遊びの広がりや保障する場や物の工夫をする力、子どもに寄り添い、子どものつぶやきをつぶさに読み取る力、さまざまな人との出会いを通してぬくもりを感じさせる力量を培わなければならない。

3. まとめ

四季を通して新鮮な出会い、驚き、発見を与え、感性や知性を育ててくれる自然、そして温かいぬくもりを感じさせてくれる地域社会は、子どもの生命を輝かせる大切な環境である。しかし、その場、その時の子どもの一挙一動に対して丁寧に、心を砕きながら寄り添う保育者のかかわり、すなわち養護的なかわりがなければ、子どもも自然も地域社会も、本ものの輝きをみせることはできないのではなかろうか。